

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

記者 「長崎に原爆が投下された1945年（昭和20年）8月9日は、朝から、どのように行動されたんですか？」

龍さん「私、勤労働員で、川南造船所に、いつも大波止から通って行っていましたが、その朝は、空襲警報があって出られなくて、家にいました。その後、父と母が、『ここにいれば危ないけれど、疎開家を探しに行こう』と、父の知人の家に行こうとしていましたから、『お母さん、空襲警報になっても逃げ切らんから、私と代わろう』と言って、母と代わったんです」

記者 「『逃げきらん』という意味は？」

龍さん「母は、体が弱かったから、空襲警報が新たに出ても、すぐ走って逃げる事ができない。それで、私が父と2人で出かけたんです」

記者 「それは何時ぐらいのことですか？」

龍さん「もう10時ごろじゃなかったかと、思いますけどね」

記者 「以前から、疎開の話は出ていたんですか？」

龍さん「話が出てはいたけれど、実際には、まだ行く段階までには、なっていなかったんですよ。その日、父が都合がよかったから、出かけようということになったんです」

記者 「4人家族でしたよね？」

龍さん「両親のほか、私と弟の4人家族でした。その日、母が家に残り、弟もおったかどうかわからないんですよ。弟は、城山しろやま国民学校に行ったかもしれません。原爆が落ちてから、母の遺体はわかりましたが、弟の遺体は全然わかりませんでした」

記者 「どっちの方向に、家を探しに行ったんですか？」

龍さん「浦上川うらかみがわだったんでしょうか？川がずっと流れてはいたけれど、その横の道をずっと、川平かわびらというところに知った方がおられるということで、父と2人ですね、歩いて。その時分は、バスもありませんでしたし、歩いていきました」

記者 「原爆が炸裂さくれつした瞬間は？」

龍さん「飛行機の爆音がしたんですね。日本のじゃない。B29。B29の爆音は、『キーン』て、なんかこう金属のような音がしおったんですね。父が、すぐもう、『これはB29だ』と言って、私の手を引いて、近くの家の軒下に入り込んだんですね。それと同時に、こう稲光のような光が目の前にあれて、それからもう、それから、わかりませんでした。家の土壁なんか、かぶってありましたんでしょ。2人とも、なんか意識がなかったんじゃないでしょうか？父が気づいて、『ここも燃えるから、早よう逃げんと焼けるぞ』って言って、私の手を引いてですね、逃げた。11時2分という時間帯は、太陽がこうこうとしておりましたが、その時はもう、真っ暗になりました。あたりがですね。その焼ける火の光で見た人たちが、顔と手足なんか出たところ、みんな、もう、皮がぶら下がってですね。ちょうど幽霊みたいな妙な顔になってしまっていたんですけど。私も見きれませんでしたけどね。その川を越えて、向こう岸の山手の方に逃げて、その晩は一晩中、山の中に泊まっておりました」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

記者 「炸裂した瞬間、光以外には？」

龍さん 「それは、わかりませんでした。もう音も何もわからなかったです。ただ光だけしか」

記者 「気付いたのは、どれぐらい後なんですか？」

龍さん 「それが、わからないんですよ。父から手を引っ張られて気づいて逃げても、時間なんかわからないし。どのくらいで意識が戻ったのか、わかりません」

記者 「気づいた時には、街はどうなっていましたか？建物は建っていましたか？」

龍さん 「街は、山の向こうでしたから。そこいらは、みんな煙で見えなかったんですよ。全然、わかりませんでした。真っ黒い、なんか、もやをかけたようにして。それが、ひどかったんですね。真っ暗になりましたから」

記者 「10メートル先も、見えないもんですか？」

龍さん 「もやが、かけたようにしてから、ちょっと行くと、わかったんですね。遠くは、見えませんでした」

記者 「本来であれば、爆心地の松山町^{まつやままち}とか、自宅があった浜口町^{はまぐちまち}とか、見渡せると思うんですが？」

龍さん 「わかりませんでしたね。山に上がりましたが、わかりませんでした」

記者 「今の山里^{やまぎと}小学校のあたりで、被爆しているんですね」

龍さん 「山里小学校よりも、もっと先じゃなかったでしょうか？よくわかりませんが、山に登ったら、長崎医科大学の病院とかわかりましたから、大学病院から逃げ出した人たちが、ほぶって出てこられてですね。とにかく恐怖感で、何もかもわからなかったんです。顔とか手とか、皮がぶら下がった人たちが、我が子と呼んだりして、あちこちに逃げ回る姿はわかりましたけど。家も、もうつぶれていたし。下敷きになった人たちが、すぐ近くに燃えかかっている家の下敷きになっていなくなったけど、私達2人で、どうにもされんですね。私も、あっちに逃げ、こっちに逃げしおりましたから。とにかく、もう、家なんかは、みんなつぶれていたようでしたね」

記者 「家の下敷きになった人は、かなりいましたか？」

龍さん 「家が、こうつぶれているでしょう。それをよく見極めもされなかったんですよ、その時の状況では。爆風、風とか煙とか火とか、こう一緒になっていましたからですね。私もあっちに逃げ、こっちに逃げ、夢中になって、川の中に飛び込んでみたりしおりましたから」

記者 「龍さんは、けがはなかったんですか？」

龍さん 「はい。お陰で、けがはしていなかったんですよ。でも、父は、どうしてか、私と同じところにいたようでしたけど、翌年、黄疸が出て真っ黄色になって、亡くなりましたけど」

記者 「助けを求める声が、聞こえたといいましたけど」

龍さん 「なんとと言われるか、『助けて』と言われるのか、とにかく、家の下敷きから声が聞こえていたんですね」

記者 「どんな声が？はっきり聞こえないんですか？」

龍さん 「はっきりは、わからないんですよ。やっぱり、ちょっと離れているからですね。とにかく、家の近くは、寄れないんですものね。火で」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

記者 「龍さんたち親子のように、逃げる先を探している人は、いっぱいいたんですか？」

龍さん 「いっぱいと言うか、何人かは、走り回ってですね。自分の子供を抱いた人、また、家族の人たちを呼んでか？そういうふうな声が聞こえていました」

記者 「やけどをしているんですか？」

龍さん 「はい。みんなボロボロになっているんですね、着ているものが」

記者 「火から追われる様にして？」

龍さん 「山の一部は、もう、竹やぶなんかは、燃えてました。でも、違うところを、燃えていないところを登ってですね。ふもとのところに、穴、防空壕なんか掘ってあったんですね。そのところに、もう亡くなって死んでるかなと思うと、頭をもたげてですね、『私も連れて行って』って言うてから。女学校の報国隊の人じゃなかったでしょうか？もう裸状態で、首は下にさげて、うずくまったようにして、『私も一緒に連れて逃げて』って言われて。父が、自分の上着を脱いで、その子に着せて負ぶって逃げようとしたけれども、やっぱり、父も、もう年だったから、山の上までは登りきらずに、途中で休んだんですね。その子供は、もう娘さんでしたけど、君が代を歌い出して、そして途中で亡くなったんですよ。その時、名前を聞いておくとよかったな、聞かずにもう何もかもわからずに亡くなった。あの時のことが、私、ちょっと一生忘れられませんですね、どこの方やったか？どこか町の人やったか？」

記者 「君が代は、自分から歌い出したんですか？」

龍さん 「はい。『君が代は・・・』って、ずっと歌っていたんですね、父の背中で。そして、父も、たまたま、ちょっと一休みというところで、腰を下ろしたんですけど。その方も、下に置いたと同時に亡くなったんです」

記者 「なぜ、君が代だったんですか？一番歌われていた歌だからですか？」

龍さん 「そうですね。その時分は、よく君が代なんかを歌っていましたからね。それを思い出して歌ったのか？それはわかりません。女学生でした。三菱の製鋼所かなんかに行つて、やっぱり、防空壕掘りを、よく学徒なんかしていましたもんね。それで、そこで、やられてあったのかなと思うんですけど」

記者 「見た感じでは、助かりそうな感じだったんですか？」

龍さん 「見た感じは、そうなかったんですけどね。やっぱり父に背負われて、きつかったんでしょうかね、降ろした途端に、声が出なかったんですけど。『あらっ』と言う時は、もう・・・息が絶えていました」

記者 「逃げたのは、どんなところでしたか？」

龍さん 「やっぱり、ちょっと小高い丘のような所でしたけども、そんな高いところじゃなかったです。他には、わかりませんでした。夜ですね、父と2人で並んで腰を下ろしていたところからは、やっぱり長崎医大から逃れて出てきたんだったと思いますけどね、なんか、うめき声とかなんか聞こえよりました」

記者 「そういう人たちを、見てはいないんですか？」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

龍さん「声がちょっとですね。うめき声みたいな声が聞こえよりましたから」

記者 「そこで一晩過ごした？」

龍さん「そこで一晩過ごして、山のところの木陰のようなところでしたけど、そこから見えたんですよ、長崎の海が、港ですね。三菱造船所も、よくわかったんですけど。その造船所も、夜中には、爆撃されていました。それは、よくわかりました。それで、もう、私達の命がこうして助かったけれども、あんなふうにして、やられるかなと思いました」

記者 「その時も、龍さんのお宅があった浜口町の方は、見えなかったんですか？」

龍さん「見えませんでした。長崎は、こう山がきれいに並ぶんじゃないし、山並みがちょっと奥まった所にあるし、手前にこう広がったところもあるし」

記者 「爆心地が、どうなったかは、わからなかったんですね？」

龍さん「全然。爆心地も何もかも、わからないんですね。どこにどうなって、こんな状態になったのか。全然、原爆と言うことも知らないし、どういう爆弾が、爆弾ということはわかるんですけどね。その時は、もう、何がなにやら、わかりませんでした」

記者 「翌日、8月10日は、どうされたんですか？」

龍さん「翌日、火が収まってから、下のほうに下りて行って、そして、自分の家だったというところに下りて行ったんですけども、もう家の形も何もなく、ただ瓦なんかが石ころみたいに小さく砕けてしまって。レンガみたいな色になって、焼けてですね。そこで、父が家の居間のところを掘って。よく親戚とかなんとか遠くにある人は、疎開したり、また、品物を送ったりしよりましたけど、うちはもうそういうところがなかったから、家の居間の床の下を掘って、そこに埋めていたんですね、衣類なんかを。ちょっと、自分達の上着なんかを入れて。それを思い出して、父がそこを掘り出しましたんですよ。掘り出した鞆を、外に出した途端に、ぽーと燃えてしまいました。鞆の中の品物、みんな出したら、ぽーと燃えたんですよ。ビックリしました。やっぱり、それだけ熱がこもっていたんですかね。全部燃えてしまいました。今思うと、それだけ火力が熱が強かったのかなと思いますけどね。何にもないようにして燃やしてしまったんです。まだ、足も熱かったですね。地面が熱かったのは覚えています」

記者 「自分の家だということは、すぐにわかったんですか？」

龍さん「ちょうど電車の線路の脇で、ちょっと石垣があったんですね。家は、その石垣の上だったから、わかりました。下の川と浜口町駅のちょうど中間ぐらいでしたからね。そのところはわかりました。自分の家ということは。でも、もう何もなくて、ただ石ころみたいな瓦だけでしたから。写真にありましたように、母の死体があったんですね。勤労働員先の造船所から、少しばかり何かお金をもらっていたと思います。その時分は鬘甲の髪留めなんかは、はやっていたんです。それで、そのお金を使って、髪留めを買って、母にプレゼントしていたのが、死体の頭に刺さっていたんですね。それとお腹のところだけは、ちょっと厚着して何枚も重なっていたのか？ちょっと端切れが残っていた。それで、母ということが、わかったんですけど。もう、弟はどこにいたのかも、影も形もわかりませんでした」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

たから、とうとう弟のことは、はい、そのままです」

記者 「龍さんのお母さんだけではなくて、他にも黒焦げの遺体はあったんですか？」

龍さん 「まわりの家があったところにも、黒焦げの遺体。家の前に、歯医者さんがあって。そこは、女の子さんばかりだったんですね。そこが何人か、7人も8人も折り重なって、真っ黒になって、亡くなってあったんですよ。そのお隣が獣医さんでしたけども、そこも、何人か折り重なって黒焦げですね。そこいらあたり、ほとんど、そういうふうで、黒焦げで重なって、亡くなっておられました」

記者 「あたり一面が、そういう状況ですか？」

龍さん 「そうです。建物とか何とかは、なかったようでした」

記者 「龍さん親子は、次の日に、ご家族を探しに来たわけですが、ほかに、そういう人はたくさんいたんですか？」

龍さん 「家の前の道路を行ったり来たりしなされたですね。やっぱり探しにか、自分のきょうだいを、お父さんお母さんを、探しに見えていたんじゃないでしょうか？そういう人たちじゃなかったでしょうかね。行ったり来たりする人たちは、覚えています」

記者 「その時は、どういうふう感じたんですか？」

龍さん 「その時は、恐怖感だけで、もう、悲しみも何も、わたし、思いませんでした。だんだん後からなって、残念な思いはしましたけども。その時は、もう、自分がそこに立っていても、急降下していたんですよ、飛行機が。ダダダーと言って。機銃掃射ですね。そういうことがありましたから、姿を見せられなかったですね。うろうろされなかったんですよ」

記者 「何が起きたと思いました？」

龍さん 「それは、何が何かわからなかったんですね。とにかく恐怖感で何を考えていたのか、自分でもわかりません。なんだろうか？これ、現実かなと」

記者 「龍さんのお宅の2階に、前の空襲で焼け出された家族がいたんですね」

龍さん 「5, 6人みえていました。北島さんという」

記者 「覚えていること、ありますか？1階に龍さんの家族が住まわれて、2階に北島さんのご家族が住まわれていた？」

龍さん 「2階の方は、どこにどうしていたのか？うちの母だけはわかりましたけど、その2階の方たちは、全然わかりませんでした。吹き飛ばされたんでしょうかね。家の近くには、遺体がありませんでした」

記者 「北島礼子さんだけ、生き残られたんですよ」

龍さん 「礼子さんも、同じ女学校の1級上だったんですけど。その時、私たちが家に来た時に、あとから1人みえたんですよ。探しに見えたんでしょう、家族を」

記者 「それは、8月10日の日ですか？」

龍さん 「はい、そして、一緒に帰ってくるのも、その礼子さんを連れて、3人で帰ってきました。礼子さんのおばあちゃんが、ここからちょっと行ったところに、1人で生活しておられたから。一緒におばあちゃんのところまで行ってから、こっちに、私たち親子だけ来ました」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

(注 8月10日に浜口町で2人が会ったのかどうか、福岡県大川市に一緒に向かったのかどうかについては、龍智江子さんと北島礼子さんの記憶に違いがあります。インタビューは、それぞれの記憶のまま掲載しています。)

記者 「北島礼子さんは、どんな状況でした？」

龍さん 「ちょっと、けがされていたようでしたね、腕とか」

記者 「自宅があったところで、出会ったんですよね？」

龍さん 「はい、家のところで出会って、もうびっくりしました」

記者 「龍さんが写真を撮影されたのは？」

龍さん 「向かいの歯医者さんの家の後ろは、崖になってたんですよ。その崖の下のところに、防空壕が掘ってあったんですよ。防空壕の中に父は飛び込んでいったんでしょう。誰か残っていないかどうかですね。そしたら、一番の奥の方に、こう曲がって、突き当たりは岩になっていましたけど、奥のほうを見たんでしょう。そしたら、小学校1年生ぐらいだった歯医者さんの娘さんを抱っこして、父が連れてきたんですけど。あっちもこっちも骨折したみたいな感じで。父は、すぐ救護所に連れて行ったんじゃないでしょうか？一時は帰りませんでしたもの、父も。私は、心配そうにして、父の後ろを見ていたところに、写真に写されたようでした」

記者 「画面の外を見ているのは、お父さんを見送っているんですね」

龍さん 「やっぱり気持ちで探していたんじゃないかと思うんですよ。どこに連れて行ったのかなと思って。後を追って見ていたんじゃないかと、思います。それで、もう、写真に写されたのも、全然、覚えていないんですよ。知らなかったんですよ。それで、ここに、NHKの方がみえて、写真を目の前に出された時、びっくりしたんですね」

(注 1995年(平成7年)に放送したNHKスペシャル「長崎 映像の証言～よみがえる115枚のネガ」の取材で、写真に写っているのが龍智江子さんであることがわかりました。)

記者 「自分だって、すぐにわかりました？」

龍さん 「わかりました」

記者 「今、この写真を見て、どう思いますか？」

龍さん 「どんな気持ちも、何もかもなかったんでしょうね。その時の亡くなった、こういうような形で亡くなった瞬間というのは、魂は何もなかったでしょうけど。私は、何も、頭、真っ白で、もう、悲しみも何もなかったですね」

記者 「お母さんの遺骨も、持って帰れなかったんですね」

龍さん 「もう、父も、持って帰ろうというような気持ちじゃなかったし。もう、やっぱり、一瞬に、こんな姿になってしまったんでしょうね」

記者 「北島礼子さんと出会ったのは、その後でしょうか？」

龍さん 「その後やったでしょうね。ちょうど家の方に見えたから、『あっ』と思ってから」

記者 「お話になった記憶はありますか？」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

龍さん「覚えていないですね。ただ、感情だけで。うれしかったという気持ちはありましたけどね。
もうなにもかも。は一」

記者 「その後は？」

龍さん「そこに、どんなしておったのか、私も覚えていないんですけど。夕方、道ノ尾みちのおと言う駅まで歩いていったのを覚えていますけど」

記者 「3人で？」

龍さん「はい。ただ、歩くのも、夢中で。道ノ尾に行ったのも、そういう気持ちだけで、逃げるといふ気持ちだけでしたけども。道ノ尾駅にも、みんなやけどした人たちですね、その駅にうめき声だけでした。その晩に、汽車に乗ったんですけども、あたりは、みんなやけどしたり重症の人たちやら、もう、まともに見られない感じだったですよ。残った人達の状態がですね」

記者 「それほど、ひどいということですか？」

龍さん「はい。みんなやけど。背中を・・・うめき声だけですね」

記者 「帰られて、お父さんは、具合が悪くなったんですよね？」

龍さん「しばらくは、そう悪くなかったんですけど、終戦になってから。父もホッとしたんですかね、食べ物になかったもんだから、川べりのところに魚とりに行ってみたり、ここいらはガネツクとか言って、カニをですね、捕ってきて、おかずにしていたようでした。自分も捕りに行ったりして。私は、女学校も、もうすぐ卒業する間際だから、卒業証書をもらいに行こうと思って、父に『長崎にしばらく行かせてもらう』と言ったんですけど、父は、もう返事はなかったんですよ。でも、私は、卒業証書をもらっておかないと、ひょっとして仕事でもするようになっては、あれだからと思って、もらいに行って、親戚のほうに、何か月か、いました。そうしたら、危篤の電報が来て。肝臓が悪くなって、寝込んでいたんですね。そして、あまり長くなかったです。真っ黄色くなって。その時は、葬式も何もありませんでした。隣組の人たちは、私たちは後から来たんで、どうしようもない。親戚の人たちに伝えてもらって、それで、ちょっところ、葬儀だけ。葬儀というか、こう火葬したぐらいで。どうしようもなかったですね。何も、体1つで来ているもんですから」

記者 「4人家族で、龍さん1人だけになってしまったんですね」

龍さん「その時、どんな気持ちでいたでしょうか？この先、どうして行かれるかなという気持ちでしたけど。ちょうど、父がお世話になった病院の先生から、『もし、あなたが、1人ならば、行くところがないのだったら、看護婦見習いのようにしてきてくれ』と言うことでしたから、それで、私は、先生の所にお世話になりました」

記者 「原爆のことは、絶えず、意識の中にあっただけでしょうか、それとも、なるべく忘れようとしてきたのでしょうか？」

龍さん「そうですね。忘れようとしても、忘れはできませんけどね。もう先生のところに、お世話になったら、先生の家庭になじむように一所懸命でしたから。原爆の時の悲しみも、思い出しはしましたが、1日を過ごすのに一所懸命でした」

長崎 原爆 100人の証言① 龍 智江子さんインタビュー

記者 「今は、小学校から頼まれた時には、被爆体験をお話になっていますね。それは、どんな気持ちで、お話になろうと思われたんですか？」

龍さん 「この先、人のためになることだったら、やっぱり。私は、人の前でお話しするということは、ダメとって思っていましたけども、何かのお役に立つならと思って。もう本当、震えながら、その時の状況を、ちょっと書いていたんですね。その通りにお話したつもりですけど。2度と、こういうことがあっては、人の命が大事だからと思って、それだけ思って、一所懸命」

記者 「今、龍さんは、62年たってみて、原爆について、どう思っていますか？」

龍さん 「もう2度と、こういう惨めな思いをしてもいけないし、みなさん、こういう目に遇われたら、大変だという思いを、精一杯思っております。それで、平和な時代になりたいと思って、平和の祈りを一途に。朝も晩も、ずっと平和の祈りを祈って、何か、そういうことがお役に立つことならと思って」

記者 「被爆者は、核兵器廃絶を世界に向けて訴えてきたんですけど、核兵器は、なくなる現状です。その現状については、どう思っていますか？」

龍さん 「本当、核兵器は、2度と、やっぱり、とにかく戦争はあってはならない。本当、怖いですね。そういう気持ちで一杯ですけど」

2007年10月10日 福岡県大川市の自宅で
インタビュー担当

NHK長崎放送局 記者 畠山博幸